

「日系アメリカ人とオーラル・ヒストリー：
Discover Nikkei と *Densho* のウェブサイトを通して」(要約)
“Internet Application of Oral History to Japanese American History:
Cases of *Discover Nikkei* and *Densho* Websites” (Summary)

山本恵里子

Eriko Yamamoto, Ph.D.*

*1982-86 EWC Grantee; 1998-99 Fulbright visiting scholar to UCLA Asian American Studies Center

M.A. in American Studies, Claremont Graduate School, 1983

Ph.D. in American Studies, University of Hawaii at Manoa, 1988

元 相山女学園大学文学部教授・全米日系人博物館研究員・UCLA 客員研究員

日本オーラル・ヒストリー学会(JOHA)設立準備委員として 2003 年 JOHA を立ち上げる

フルブライト中部同窓会・EWC 中部同友会例会
2011 年 11 月 19 日@愛知大学車道校舎

本稿は、上記の口頭発表に基づく要約のため、詳細や脚注・参考文献は省略されています。著者の許可なき引用はご遠慮ください。ご連絡は eyamamotojanm@yahoo.com までお願いいたします。

近年オーラル・ヒストリーという名称が日本でも定着し始め、研究者の活動も幅広くみられるようになった。日本オーラル・ヒストリー学会が設立され、着実に成長する。それ以前には聞き書き・生活史・口述史などの名称でも、歴史の手法として利用されてきたのが、今世紀に入りようやく基盤が固まった。

アメリカにおけるオーラル・ヒストリーの歴史は長い。口述インタビューをテープに録音し、トランスクリプトを作って記録・保存するという手法は、第二次世界大戦後アメリカにて広がった。テープレコーダー(オープン・リール)の出現により可能になったこの手法は、歴史的証言として個人の述懐を記録することで、速記・談話メモの限界を打ち破った。その後はカセット・テープ・レコーダーの普及で一層広まり、そして 1990 年代頃からはデジタル録音・デジタル・ビデオ録画とインターネットの普及によって、新たな域に到達した。

本日は、そのような発展の中で、日系アメリカ人たちがどのようにオーラル・ヒストリーを自らの歴史記録に取り入れてきたか、そしてインターネットで公開するような状況になっているかを紹介したい。

I. オーラル・ヒストリーの発展

オープン・リールのテープ・レコーダーは、出回った当初大変高価な機械であった。ロンビア大学のアラン・ネヴィン教授（歴史学）は、この貴重な機械の有意義な利用法として、回顧録を書かない人々にインタビューをし、その談話を記録保存することを提唱した。もともとは引退した政治家などを対象としていた。

しかしこの手法は、多民族国家アメリカの民主主義的性格にうまく当てはまった。黒人たちなど文字を持たない人々には、口頭伝承の伝統があった。マイノリティや本を書くこととは無縁の人々、歴史家が記録しない庶民は、書かれた歴史に残ることが少ないが、オーラル・ヒストリーは、彼らに語らせることで記録に残すことを可能にした。特に1960年代のマイノリティ運動・女性の権利拡張運動と連動し、白人により書かれたアメリカ史に出てこない歴史、つまり草の根の歴史に用いられた。その結果、歴史学・アメリカ研究・女性学・民族研究・教育・科学・医学史・文化史等、多岐の分野で重用されるようになった。

II. 日系アメリカ人の歴史とオーラル・ヒストリー

エスニック・マイノリティである日系アメリカ人と、オーラル・ヒストリーの関係は、特殊なものがある。

日本からアメリカへの移民が始まったのは、明治元年のハワイへの移民が最初で、1885年の官約移民開始以降本格的となる。当初「出稼ぎ」意識が強く、アメリカ定住を予定していた移民は稀であった。移民排斥や人種差別を受け、祖国からは「棄民」とも呼ばれながらも、アメリカ社会に次第に根を張り、1920年代以降定住志向が強まる。1930年代にはコミュニティの発展とともに、同胞発展史などが発行され、移民としてのプライド、祖国へのプライドが表現される。日米対立が深まるにつれ、反日感情が懸念されるが、1942年12月の日米開戦後は決定的となり、日系人のアメリカでの地位は一変する。1942年2月、大統領令(Executive Order 9066)により、西海岸の一世・二世は強制収容される。

日系アメリカ人はもともと「遠慮」「謙遜」などを美德とし、寡黙な民族とされたが、第二次世界大戦中・戦後一層寡黙となる。ビル・ホソカワは、彼らを **Quiet Americans** と称した。強制収容所体験は恥とされ、一世・二世は、三世に自らの体験を語らなかった。モデル・マイノリティと呼ばれるほど、強制収容所から再定住した日系人は、ひたすら寡黙なまま努力を続け、社会経済的地位を向上させた。

それが変化したのは、1970年代からであろう。三世が公民権運動、エスニック・マイノ

リテイの運動に触発され、アジア系アメリカ人としての連帯・運動を通して、自らの歴史に目覚める。強制収容の歴史を、一世・二世からではなく大学や他者から知らされて、親に問い詰めた。その歴史を記録し、政府の不当な扱いに抗議すべきだという思いと、三世の一・二世の説得が、1978年には補償要求運動(Redress movement)につながる。

強制収容の状況を記す当時の記録がないため、証言(oral testament)が重要な証拠となる。アメリカ議会の公聴会で日系人たちが証言者として口を開き、屈辱的な体験を語った。二世たちは、自らの体験を公的な場で語ることで歴史を振り返り、強制収容はアメリカ史の一部として、消されるべきではないと自覚する。アメリカで民主主義が機能しなかった反省を促すという重要性を通し、エスニック・プライドが高揚されたといえる。

1988年、政府(レーガン大統領)から補償・謝罪を勝ち取った後も、日系アメリカ人史の保存・展示・教育に意欲(preservation + presentation + education)に意欲を示した。彼らはもはや Quiet Americans ではなかった。公的(public history)・コミュニティ的(ethnic history)・私的(family history)な目的で、日系人たちは各地で様々なオーラル・ヒストリー・プロジェクトを展開するようになった。強制収容という特異な体験を後世・他者に伝えることで、民主主義を守るという使命感が、そこに現れていた。

実質的に三世は社会的上昇を果し、日系コミュニティは拡散していたにも関わらず、エスニック・スタディーズの広がりによる関心の高まりや、オーラル・ヒストリーの普及・認識度の高まりが、一世・二世の話すことへの抵抗を減らしたといえる。アメリカ史の重要な一部として、積極的に自らの歴史を語り継ぎたいと、姿勢が変化していく。

研究機関による日系アメリカ人オーラル・ヒストリーも、1970年代から広がっていく。代表的なものは、UCLAのJapanese American Research Project (JARP)やCalifornia State University- FullertonのOral Historyである。民間では、1980年代に設立されたJapanese American National MuseumやNational Japanese American Historical Societyが取り組み、浸透していった。

III. インターネットで公開される日系アメリカ人オーラル・ヒストリー

アメリカのオーラル・ヒストリーは dissemination を重要視する。つまり収集されたインタビューが歴史資料としての価値を発揮するために、保存されるだけでなく、利用が可能でなければならないということである。インターネット普及以前は、アーカイブに預けるなどの方法が推進されていた。しかし、インターネットはこの状況を大きく変えた。

日系アメリカ人のオーラル・ヒストリーも、Quiet Americans と呼ばれた時代が信じられないと思わせるようなサイトがある。ここでは、その二つの例として、Densho と Discover Nikkei をご紹介したい。

A. Densho (<http://www.densho.org>)

まずは日系人のオーラル・ヒストリー・インタビューを収集・公開している NPO の

Densho を紹介したい。Digital Archives を持ち、インターネットでアクセスできるようにしている。主な言語は英語（日本語のインタビューは日本語）である。

Densho はシアトルに拠点をおく日系人 NPO で、1996 年に設立され、同名のインターネット・サイトを運営している。名前の意図は、"to pass on to the next generation" とのことで、設立時の目標は、強制収容された日系アメリカ人のオーラル・ヒストリーを収集することだったが、現在の目標は “to educate, preserve, collaborate and inspire action for equity” とされている。

創設者で現在の Executive Director は、Tom Ikeda という元マイクロソフト勤務のシアトル出身の三世である。彼の祖父母と両親が強制収容体験者であった。マイクロソフトでマルチメディア CD-ROM などの開発に携わった後、他社で人工腎臓の開発者や証券アナリストとして財を成し、Densho は社会奉仕活動として行っているという奇妙な人物である。

Densho は、日系人の歴史を保存・公開することを目標に、オーラル・ヒストリー・インタビュー（ビデオ）の収集し、デジタル・アーカイブ化して、一般に公開している。そのアーカイブの概要は次のように記されている。

- Holds over 500 visual histories (more than 1,000 hours of recorded video interviews) and over 10,800 historic photos, documents, and newspapers
- Continues to record and collect more
- Covers the Japanese American experience from immigration in the early 1900s through redress in the 1980s with a strong focus on the World War II mass incarceration

デジタル技術を駆使することで、日系アメリカ人史を普及させるという目標は、次のように表現されている。

Densho uses digital technology to preserve and make accessible primary source materials on the World War II incarceration of Japanese Americans. We present these materials and related resources for their historic value and as a means of exploring issues of democracy, intolerance, wartime hysteria, civil rights and the responsibilities of citizenship in our increasingly global society. We encourage use of these resources to expand awareness of our country's diverse history, to stimulate critical thinking, to develop ethical decision-making skills, and to help ensure that democratic principles are upheld now and in the future.

そのアーカイブは、簡単な登録さえ済ませれば誰でも利用できる。多数の日系人たちのインタビューに、音声・トランスクリプトの形でアクセスできる。日本語のものもあるが、使用言語は主に英語である。テーマがコード化されているので、研究者が何かのテーマに

関する日系人の証言を見つけたいと思ったら、キーワード等で検索することも可能である。人物名で検索もできる。各自のプロフィールを見ることも可能である。実際の録音された肉声が聞けるため、トランスクリプトの文字だけでは伝わってこないニュアンスやアクセントなども、感じ取ることが可能である。日系人に関する様々な研究や教育に利用できるリソースといえるであろう。

(この後インターネットによる実際のサイトの紹介。<http://www.densho.org>を参照のこと。)

B. *Discover Nikkei* (<http://www.discovernikkei.org>)

もう一つの例は、*Discover Nikkei* である。世界各地の日系人をつなぐ国際サイトとして、英語・日本語・スペイン語・ポルトガル語のページを有す。歴史のみでなく、今現在起こっていることまでカバーされ、オーラル・ヒストリーはその一部である。Japanese American National Museum (全米日系人博物館) により運営されるが、Affiliates として多数の日系人組織や、大学などがかかわっている。

日系アメリカ人に関する部分での目標は、“to promote understanding American experience”と書かれている。

We share the story of Japanese Americans because we honor our nation's diversity.
We believe in the importance of remembering our history to better guard against the prejudice that threatens liberty and equality in a democratic society.

オーラル・ヒストリーの部分であるが、もともと全米日系人博物館は独自のオーラル・ヒストリー・インタビューを手掛けていた。Regeneration Project というので、戦後の再定住期に関してオーラル・ヒストリー・インタビューを企画・収集・保存し、トランスクリプトを本形で出版し、各種展示でも紹介していた。

Discover Nikkei は、全米日系人博物館が取り組んできた国際プロジェクト、*Nikkei Legacy Project* から発展した、南米の日系人とも連帯を深める研究プロジェクトの発展的な形として、日系人をつなぐ多国語・多国籍の国際ウェブサイトの立ち上げを目指し、2003年から始動した。博物館が日本財団より助成金を得て、アメリカ各地と中南米の日系人組織、日本人研究者に連帯を呼びかけ、2004年秋にはウェブサイトを公開するに至った。

プロジェクトには、博物館内では専属のメンバー2名の他に、各部署から代表者が加わりった。(筆者は2003年4月から2004年秋まで参加した。) ウェブ・デザイナーはイギリス在住のイギリス人だった。外部からはAffiliatesとして、アメリカ国内の日系人組織・大学(スミソニアン博物館、ニューヨーク大学、ハワイ大学等)、NPO(Densho、全米日系人歴史協会など)が参加し、その他の国々カナダ、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン。パラグアイ、チリ、日本等一からは研究者・活動家が専門家メンバーとして参加した。日本からは、飯野正子氏(津田塾大学)、桑井輝子氏(白百合女子大学)、竹澤泰子氏(京都

大学)、小島茂氏(海外移住資料館)に参加していただいた。

これまで日本からの移民とその子孫は、〇世、日系〇〇人といった形で、世代や国籍が強調されてきたが、Nikkei という言葉により、そのような区分を超えて繋がり、情報をシェアできるのが、Discover Nikkei の目標である。また、非日系の人々にも情報発信をする。ブログでの交流、論文や記事の投稿も可能である。まずは英語・日本語・スペイン語・ポルトガル語の四カ国語で運営されているが、そのうち中国語も期待される。日系人が自らの歴史を知り、誇りを持ち、歴史を保存しようという意識をもたせる

Discover Nikkei に載っているオーラル・ヒストリー関係のページをみてみよう。

(この後インターネットによる実際のサイトの紹介。<http://www.discovernikkei.org> 参照のこと。)

オーラル・ヒストリー・インタビューは、下記のように検索できる。

1. “Stories” のページを選択する。
2. “Interviews”を選択する。
3. “Featured People”を選択する。
4. “Search”を選択する。
5. “Advanced Search”を選択すると、“keywords,” “interviewee,” “topic,” “tags”に入力し検索することができる。

上記のように進んでいくと、博物館や Affiliates 団体のインタビュー(音声やビデオ、トランスクリプト)にアクセスできる。

また、オーラル・ヒストリーの手法もビデオ映像を伴い、ステップバイステップで紹介されている。これは、日系人が自らの歴史をオーラル・ヒストリーを用いて記録・保存することを奨励するため、特に若い世代にも理解・実践してもらえるようなマニュアルとなっている。日系人以外にも勧めたいページである。(初めは博物館スタッフの姿が現れるような、専門的内容であったが、現在は小中学生にも分かるような身近な内容である。)

1. “Resources”をクリックする。
2. “How to”から “Interview”を選択する。
3. “How to do your own oral history interview” で、ビデオによる解説をみる。
4. “Share your interview” で、公開の方法をみる。

C. その他

- ① “The Japanese American Oral History Project Collection”

(<http://coph.fullerton.edu/JAOHPAbout.asp>)

California State University Fullerton の The Center for Oral and Public History によ

るオーラル・ヒストリーのサイトの中で、Art Hansen 教授による1970年代のインタビューは、トランスクリプトだけであるが、完全公開されており、印刷も可能である。ハンセン教授の「できるだけ多くの人に利用してほしい」との思いが込められている。

② *Go for Broke* (<http://www.goforbroke.org/>)

カリフォルニアの日系三世 NPO、Go for Broke National Education Center が、二世兵士のオーラル・ヒストリーのビデオ・インタビューを収集し、公開しているインターネット・サイトである。高齢になっている二世退役軍人が、アメリカ国旗を背景にして、その体験を三世世代に語っている。

IV. インターネットの日系人オーラル・ヒストリーの活用方法

このように世界のどこにいてもアクセスできるようになったオーラル・ヒストリー・リソースは、多くの人に活用されることが望まれる。

1. 教育の場面での利用

学生にオーラル・ヒストリーのインタビューのビデオや音声、トランスクリプトを利用させる。録音された日系人の肉声・ビデオを通して、彼らの個々の体験に触れることは、本だけでは学べない日系史に触れることを可能にする。消えた世代や消えゆく世代の声も聞くことができる。アメリカの学校では、日系人に授業で生い立ちや体験を語ってもらうことで、強制収容の歴史を伝えようとする取り組みも、報告されている。生身の二世に来て語ってもらうことは不可能でも、インターネット上の語りを利用することで、顔が見え、声が聞こえる歴史を提供することが可能となる。また、Discover Nikkei では、その感想をブログなどで共有することも可能であるから、インターネット世代の学生は能動的な活動を通し、日系史への関心を深めてもらえるのではないだろうか。

2. 研究面での利用

インターネット上のオーラル・ヒストリーは、それのみで研究の資料とするのは難しいといえるが、日系史の研究において **supporting document** として引用することは可能である。たとえば著名な二世活動家、Sue Embrey のインタビューが Densho から入手できる。Redress movement の歴史を調べる際、引用できるであろう。

その他の利用可能性としては、日系人の言語を観察・分析することで、例えば二世と三世の言語の差や、ハワイと本土の言語の差なども調べることができる。

また、日本でのオーラル・ヒストリー普及のため、役に立てることも可能であろう。インタビューを計画したい場合、さきほどの Discover Nikkei のインタビュー手法説明は入門的ではあるが、参照すれば参考になるであろう。また、インタビュー例を見ることで、内容的に参考にできる。

3. 日系人との繋がりと認識のツールとして

近年は日本への「出稼ぎ」日系人が増えたために、日本人は日系人に対する認識はある程度深まったといえる。けれども、祖先が日本人なのだから日本的だろうという認識が根底にあると、彼らの辿った道、各国での日系人の歩みに思いを馳せることは難しい。

日系人のオーラル・ヒストリーは、各地で様々な境遇に遭遇し、その中で懸命に人生を切り開こうとした人々の存在を、我々の心に刻んでくれるといえる。

終わりに

日系人史には、日系人が自らのアイデンティティを模索する意味合いが含まれるといえるが、オーラル・ヒストリーには特に顕著であろう。そこには自らを語ることが歴史であり、自らが歴史を紡ぐのだという自信がみられる。主観と客観の狭間を考えさせられる面はあるが、日本にいる我々は、歴史を研究する際「客観的な歴史」を求めすぎる傾向を感じる。我々は *Densho* や *Discover Nikkei* を見ることで、歴史とは生身の人間が作り上げ、その彼らの生きた記録であると感じられるのである。